



西早稲田中だより

新宿区立西早稲田中学校 03(3205)9674

「あたりまえだけど、とても大切なこと」校長 片倉 元次



暦の上では秋とはいえ、残暑の厳しい日が続いております。夏休み中、生徒たちは部活動の各種大会、発表会などいろいろな場面で生き生きと活躍していました。また、職場体験や防災訓練、夏祭りなど地域での活動でも大勢の生徒の姿を見ることができました。お世話をいただいた皆様、誠にありがとうございました。

この夏休みに自宅で本の整理をしていたところ「あたりまえだけど、とても大切なこと」(ロン・クラーク著 亀井よし子訳 草思社)という本が出てきました。アメリカの小学校の先生が子供たちに、人生をどのように生き、どのように楽しむか教えるために決めた「50のルール」が書いてあります。ルールの内容を少し紹介すると、

<ルール1> 大人の質問に答えるときには、「はい、そうです」とか「いいえ、ちがいます」というようにいつもきちんとした言葉づかいで答えよう。ただうなずくだけではだめだし、乱暴な答え方もいけない。

<ルール30> 学校にいる時も、校外学習に出かけたときも、だれかが何かを落としたのに気づいたら、拾ってその人に渡そう。落とした人のほうが近いところにいる時も、身をかがめて拾おうとするところを見せるのが礼儀だ。

<ルール47> 人間はまちがいをおかすものであることを受け入れよう。そのうえで、まちがいから学んで先に進もう。

どれもあたりまえのことですが、自分でもきちんとできていないことがいかに多いかと考えさせられました。そして訳者も書いているように、この本の内容は単にマナーを教える本ではなく、子供の中に自尊感情と他人を尊敬する心を育て、成熟して責任感のある大人の土台づくりをする本であることがよくわかりました。国や時代に関係なく、人間としてあたりまえのことをしっかりと生徒たちにも伝えていきたいと思います。

さて、2学期は一年間で最も長い学期ですが、文化の秋、読書の秋、スポーツの秋などと言われるように、いろいろなことに熱心に取り組むのにとってもよい時期です。一日一日を大切に、実りの秋に一人一人が豊かな実を实らせてほしいと思います。そのためには、夏休みの生活リズムから早く学校の生活リズムに戻しましょう。ぜひ「あたりまえだけど、とても大切なこと」をご家族で話し合ってみてください。

<2年生職業体験>

夏休みの間、2年生の生徒132名が、西早稲田・大久保・その他周辺地域の計49ヶ所で職業体験を行いました。事前訪問に行くときの緊張した顔とは違って、職業体験を終えて報告に来た生徒の顔には、満足げな笑顔が浮かんでいました。「初めて接客を経験して、楽しかった!」「まかないがおいしかった!」「レジ打ちを初めてやりました。袋詰めも楽しかった!」など、楽しい感想もあれば、「ずっと立っているのが辛かった」「仕事する人に敬意をはらう」「ゴミを積むとき腰が痛かった」と働くことの大変さを学んだ感想もありました。しかし、生徒から共通して感じたことは、仕事の楽しさと大変さを知り、同時に職場の方々が誠実に仕事をする姿をみて、尊敬の念を抱いて帰ってきたということでした。職業体験を行った2年生は、この夏休みにもう一步大人に近づけたと思います。夏休み明けの3日間は、夏休みの間に職業体験ができなかった生徒が、西早稲田中学校の主事室で体験を行います。

職業体験のためご協力いただいた、保護者の皆様、地域の皆様、誠にありがとうございました。

2学年職業体験担当 李 珉 貞



<バスケットボール部 都大会を振り返って>

3年生にとって、最後の大会でした。7月、これからさらに暑くなるという時期に、男女それぞれに熱い戦いがありました。「バスケットを通して指導をする」と言いますが、選手達は都大会という一つの大きな機会を通して、勝敗以外にどのような価値を見出せたのでしょうか。

ある選手は怪我と戦いながらの出場。これは一人の話ではないのですが、痛みを耐え、しかしながら最後まで走りきった選手。彼は拮抗している試合の後半戦、2年生ではその重圧を背負いきれない局面があることを知っているかのように、何度も何度も負傷した部位をアイシングしてはコートに戻り、立派に戦っていました。またある選手は、試合の最後にはベンチに戻らざるを得ない状況でした。それでもベンチでできる最大のことをやっていました。ボールに触り、コート内を走ることだけが試合なのではないことを後輩に教えているようにも見えました。

さらに別の選手は、予選から怪我と向き合いながらの葛藤の連続でした。負傷した足をかばうがあまり、シュートフォームのバランスが崩れた様子で何度も何度も修正しようと練習をがんばっていました。それだけではありません。自分の怪我が与える周りの選手への配慮や責任など、ここでは書き切れないほどの葛藤があったと思います。そしてまた、それをひしひしと感じ取る周りにもまたそれを通して考えることがたくさんあったように思います。

バスケットボール部の練習は厳しいです。でも、部活動のすべての場面で「自分を高めよう」とする時間があつたのではないのでしょうか。さらに、それを共有している仲間がいたこと、そして、その仲間とより上を目指すことができたことは掛け替えのない経験だと私は思いました。

バスケットボール部顧問 竹下 悟